◇講演◇

# 幼児との教育について思うこと
## ―その二―

河辺　杲

### 登校拒否の子どもとともに

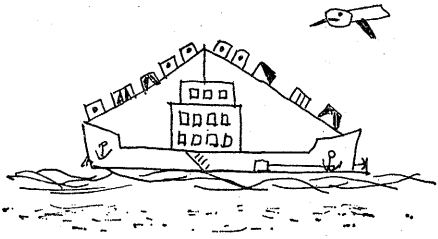
三つ目にお話したいことは、私がちょうど教育相談をやっておりましてぶつかっている問題の中で最近非常に増えてきている登校拒否児の問題があります。学校恐怖症といいますか、そういう神経症的な子どもがたいへん増えてきているわけですが、最近次のような子どもに出会いました。ちょうど二ヵ月ほど学校を休んでおりました小学校二年生の子どもなんですけれども、母親はもう四苦八苦して、一度お稲荷さんに見てもらわなきゃいけないというんでお稲荷さんの所へ走って行ったり、少し八卦をやられる人の所へ行ったりされると、あなたのおばあさんのおとむらいができていないから、なんていうことをいわれて、まあお母さんの最初のインテイクの時の話を総合しますと約二十万円ぐらいの金を使ったといわれるんですね。もうあなたの所が最後の頼みでここへ来てだめだったら私も精神病院へ行かなきゃいけない、なんてな非常に大げさなことをおっしゃっていたのです。

子どもは第一回目に来ました時に、本当にお母さんのうしろにしがみつくようにして泣いてばかりおりました。ちょうど私の所へ来る前にある児童相談機関へ行ったようなんですけれども、その児童相談機関でもそのような状態で、まあインテイクが過度に調査的になったみたいで、子どもが退屈してしまったり、たいへんそのふん囲気に何か恐怖感を抱いて、どうももうその児童相談機関に行くのはいやだっていいまして、私の方へ回ってきたわけです。それまでに精神病院へ連れて行って精神科のお医者さんに見ていただいたり、薬ももらっていたようですけれども「僕の病気はそのような薬を飲んで治る病気じゃない」って、子どもは、もうちゃんと自分のことがわかってるかのようなことをいっていたようなんです。第一回目に来た時はお母さんから離れません

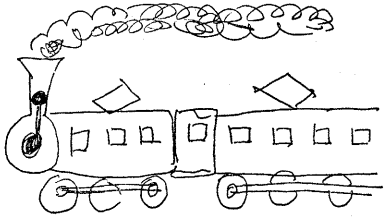
し、プレイをしようと思ってもプレイできないままに、お母さんのお話を聞くだけで四十五分ほど面接をして帰ってもらいました。その次の週に来ました時にも、お母さんのそばを離れなかったんですけれども、プレイルームで話合っておりますから、おもちゃがたくさんうしろにあるのが気になるらしく、そのおもちゃの方にちらちらと目をやっておりました。それで、お母さんの話の途中に「僕、もしうしろのおもちゃで遊びたいのなら遊んでもいいよ」っていいますと、つかつかとその遊具の所へ行ってそのおもちゃをなぶりはじめました。でも、すぐもどってきました。

そのうちにちょうどお母さんと話しているすぐそばに机があって、そこに画用紙が用意してあったんですが、その画用紙に絵を描くと言い出しまして、絵を描きました。最初の絵は艤装って言いましょうか、旗が立っていまして船が今にも何か、こうきれいに飾ってあって、これからどこかへ船出でもしていくのかなというような感じのする絵を一枚描いてくれました。お母さんに聞きますと、こんな絵を描いたのは初めてだそうで、大がい、西部劇のような絵を描くのが得意なんだそうです。私はその船を見た時に、いわゆる船出のテーマといいますか、いわゆる出て行きたいという気持ちは何かあるんだなあ、ということを直観的に感じました。その日はこの絵を描いただけで帰っていったんですけれども、しかしよくよく見ますと、大がい、こう煙突が出て煙がもくもくと出るんですけれども、この子どもには煙突がない。もちろん煙も出ていない。まあ最近の原子力船であれば煙突はないかもわかりませんけれども、何かこう艤装してそして船出をしようという、そういう心構えはあるらしいけれども、エンジンはなかなかかかってきていない、というように二回目の時に感じました。

それから三回目の時には三枚描いたのですが、一枚目の絵が、いわゆる機関車の絵②でした。今はこんな汽車走っていません。電気の機関車しかないんですけれども、昔の汽車を描いてくれました。そして盛んに煙が出ているわけです。ところがレールを描



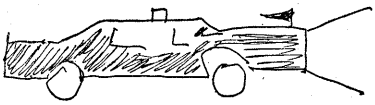
①



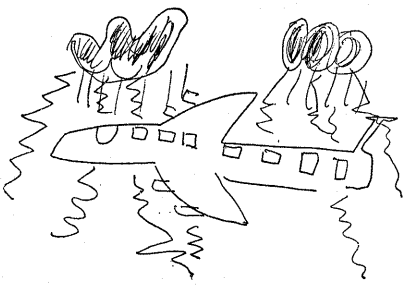
②

いていない。何かこうエンジンはあるんですけれども、エンジンは前の船から比べるとかかってはきているんですけれども、どうももう一つ走る所がない。無軌道車みたいになってるんですね。それから、二枚目のはいわゆる普通の乗用車③、これは紫と黄色で描いていまして、あまり感じられるものがなかったんですけれども強いて色の上でいえば、よくいわれる紫であれば寂しがりやだとか、黄色で言えば甘えん坊であるとかいうようなこともそこから感じられないこともないんですけれども。

その次に描いてくれたのはねずみ色で、いわゆるダグラス型の飛行機④を描いてくれました。そして雲がこう出てまいりまして、で、もうこれで終りなのかな、と思ったら、雨が降ってまいりまして、そしてさらに雷光がしてきたんです。この辺になってきて私は黙っていられなくなって「大丈夫かな。この飛行機、雷光がピカピカとして、雷が落ちて、燃えて落ちやしないかな」っていったら大丈夫だっていいました。まあ、この船といい、飛行機といい、その他に、鳥はまあ描いていませんけれど、鳥だとかいうようなものはいわゆる飛び立つ、といいますか、そういう意味のことを私はよく感じるんですけれども、しかも、そういう危険に満ちた中でもあえて大丈夫だということをいっているところに、何かこの子どもの内面に少し、こう元気さを取り戻してきたような感じがしたんです。



③



④

で、それでその時は終わったんですけれども、その次の四回目の時に来て描いてくれましたのは、まん中に小さな木がありましてそこに人が一人いるんです。これは何だって いったら「保安官だ」っていうんです。もう一人の方はインディアンだっていうんです。そして向こうにあるのはサボテンなんです。それからこういう線が描かれまして、今ピストルでうったら、こちらにいるインディアンが倒れたんだっていうわけです。ところがその倒れたインディアンが描けていないもんですから、「もう一枚画用紙をつないであげようか」と。そして「つないであげたら描くか」

ってきいたら「描く」っていうわけで描いてくれました。この辺から赤い色で血がたらたらと出てここんところにあたっているんですね。で、またこっち側がこういうふうにうっているのを描きました。「これは何だ」っていったら「インディアンが自分がやられる前にうった弾丸がはしごに当たってはしごがこわれたんだ」てっいうんです。はあっと思いました。今度は前よりもっと大きなサボテンのようなものを描きましたので、「サボテンかな」っていったら、「さわったら爆発するサボテンだ」っていうんです。

つづいてこんどは、ここに大きな人物を描きまして「これは何か」っていったら、「保安官で助けに来たんだ」っていうわけです。そして二匹の馬が描かれまして、「これは何だ」っていったら「一匹はこの保安官が乗るんだし、一匹は助けた保安官を乗せて帰る馬だってこういうんですね。つぎにこちらにも馬を描きまして、らくだのような馬でしたけれども。「これは何だ」っていったら「もう探しても保安官がみつからないんでこのインディアンがこれに乗って帰るんだ」ってこういってくれたんです。「ああ、よかったねえ」ってこちらはひとりでにそういう言葉が出てしまったんですけれども。

「それじゃもうこのたすけに来てくれた保安官にすぐこのはしごをなおしてもらって降りてこられるね」っていったら、「もう直してもらわなくてもここから飛び降りられる」っていうんです。その時に、私はこのように、いろいろかわりながら、本当にまわりが危険に満ち満ちていて目に見えない恐怖感をもっているんだなあと感じました。サボテンの木といい、インディアンといい、そして保安官を探そうとしている。きっとこの、ここにいるのがこの本人ではないのかなあってその時感じました。そこでもうほとんど時間がきてましたので、それで本人が描き終わった時に、こういうことはあまりいつもしないのですが、私はフォローアップのつもりで、「もしこういう劇をするんだったら、僕はど

れがやりたい？」っていったら、「これだ」と木の中の小さな保安官を指さしました。

この小さな保安官がやりたい、ということはまさに自分のその時の気持ちがこれだったんだろうと思うんです。さらに蛇足でしたけれども、お母さんはいったいどれなんだろうと思ったものですから「ぼくのお母さんはどれをやるだろう」ときくと「この大きい保安官だ」っていうんです。これも蛇足だったんですけれども私の位置がちょっとほしかったものですから「このおじさんはどれだって言ったら、「これだ」とまた大きな保安官を指さしてくれました。もうすでにお母さんも私も、そこには何ら介在する必要なしに自分で飛び降りられるような状態になっていたみたいですけれども、それまでというのは、このプロセスをたどって行きますと、危険に満ち満ちた中に自分がいるっていう、周囲が本当に危険に見えていたんだろうと思うんです。

こういうようなプレイセラピイ（遊戯治療）の中で、私たちはよく絵を見たり、遊びを見ながら、その中で起こってきている子どもの、何といいますか、心の原型といいましょうか、人間の根元的な世界というような言葉でも言えると思います。けれども、そういうものをできるだけ把握したい、理解したい、という気持ちでいつも接しているんですけれども、何かそういうふうに私はもっともっとこういうふうな接し方をしながら子どもの根元的な世界にせまっていくことが保育の中でも必要ではないかと思います。できるだけ本当の子どもの内面に近い所で理解しようということは、教育の新しいこれからの内容として私はとても大事なことじゃないかな、そしてそういうことが、何かわからなくても、本当は最後の所はわからなくても、何かそのわかろうとする努力が、努力していることが相手に伝わっていく、その中で子ども自身が成長への衝動のようなものをとりもどしていき、よりよい成長をしていくといいますか、安心感を得て成長していくと申しましょうか、そういうことを感じました。

でも私はここでふと思ったんですが、今までの自分であれば、ふんふんといってありのままを聞いて、見ていただけの、そういう姿が自分の受容的な態度であるかのように自分では思っていましたけれども、最近の自分はそうじゃなくてもう少し積極的にかかわっていって、そしてそのかかわりの中でも自分が感じるもの、私自身が何か感じてくるもの、そういうものをできるだけ自分自身が見つめようとしているわけなんです。そういうことが本当の受容的態度ではないんじゃないか、というふうに自分で最近思ってきております。受容的な態度といいますか、あるいは共感する態度てなことは非常に教育の中でも、あるいは皆さんが現職

教育の中でも、しばしば問題にされているのではないかとは思うんでけれども、もっとじっくり見つめる、眺める、いわゆるある距離をおいて眺めるということも大事なことですし、同時にまた、いわゆるもっとかかわりながら相手との対決の中で自分の中に起こってくるものを自分がわかっていくことが、本当に何か大事なことのように思います。そのことによって、子どもがこれに呼応するかのようによりよい成長していく。ちょうどこの子の最後の絵をみながら私はその時、何かそういう予感がしていたんです。すると次の約束の日の朝電話がかかりまして〝今日から学校へ行くようになりました〟と、〝でお礼に行きたいんだけれども、やれやれというので病気になってしまって寝込んでしまいましたので、御礼にもいけませんが〟とお母さんがいわれました。

ちょうど四週間、週に一回ずつ通って、この子どもは二ヵ月の登校拒否をおさらばして学校に元気よく行くようになったわけです。その後本当に元気よく通っているそうです。

## 子どもとのかかわり方を再び考える

私が、何かこういうことを申しあげますと、特殊な勉強をしないといけないかのように感じられたかもわかりませんけれども、専門的な勉強もするにこしたことはありませんが、もっとこう人間に密着したところで、私は何か保育っていうものを考えていきたいなあっていうことを最近しみじみと感じておる一人なんです。

これは少し角度が違うんですが、最近これも今年卒業されてきたばかりの先生が話されていたんですが、子どもたちと山登りをして遊んでいて、本当にもう夢中になって遊んでいて、幼児をかきのけるように上がっていた。その自分を後で振り返って、ちょっとこれは子どもに近づきすぎたのではないか（？）子どもの世界にもっとせまらなきゃいけないっていうんだけれど、これは入り過ぎたんじゃないかなと。たいへんよく子どもと一緒に遊べたという気持ちと共に、そういう反省を持ったということを、保育が終わったあとで職員室で話していたら、先輩の先生から「子どもと一緒に遊ぶのはいいが、あまり入り込んでしもうたらあかんえ」「あまり入り込んでしまうと、子どもが見られないんだ」という指導助言をいただいたということを話していました。私はその話を聞きながら、まさに先輩の先生らしいことをいわれたなあという感じがその時してきたんですが、私も過去だったらそういうことをいったかもわからないし、まだ心の片すみにはそんな気持ちがどこかにあるかもわからないんですけれども、私は最近もっと子どもと対等になれる、いわゆる、かきのけてでも上がって

いった、先輩の先生からすれば少し入り込みすぎて、なにか先生というものを見失ってしまっているんじゃないかなと思われるぐらい、こう入っていかれた先生を、私はすばらしいなあ、と思うようになってきました。そこまで入れるということが保育の中ではとても大事なんじゃないかなあ、で、そのあまり入り込むと子どもが見られないということはいったいどういうことなんだろうということをまた考え始めておりまして、私は先ほどもいいましたように、本当に人間に密着した所で、自分の中で何が起こっているかということが感じられていればいいと私は思うんです。自分自身が感じられないで、いわゆる子どもが果たして見られるだろうか、ということもその時に、反応的に思いました。もっともっと自分自身に素直になるということがどれほど大事なことなのか、何か本当に入り込めないでいて、いわゆる中途半端な所にいつも自分を置いておいて果たして本当に子どもの成長のためになるんだろうか、ということをもう一度考え直してみたいな、とその時思ったんです。

なぜそういうことを私最近思うかと申しますと、これも数年前からですけれども、何人かのグループでもって、いわゆるエンカウンターグループというものをもちまして、どういうような状態の時に本当に人間関係がスムーズにいくのかということを、自分に非常に関心を持って私の一つの課題にしているんですけれども、そういうことをやっている時に、そのグループでは指導者とか世話人とかそういう言葉を使わないで、いわゆるそのリーダー的な役割を持つものをファシリテイター、ファシリテイトしていくという言葉でいっているんですが、いわゆるそのファシリテイトというのは促進、これは訳してしまうともう日本語になってしまって本当のファシリテイトしていく意味というものがつかめなくなるかもわかりませんし、ああ促進か、というふうになってしまうんです。けれども、本当はファシリテイトはファシリテイトとしてもっと追究していかなきゃいけないだろうと思います。この中で本当にグループの人間関係がスムーズに促進されていく時には、そのいわゆる促進者になってる者がどこまで、同じような所まで降りられるかという、たとえば超然としたような姿勢でいたり、紳士ぶったりしているようなファシリテイトの仕方では、なかなかそのグループの深い関係が促進されていかないということを、最近私は自分自身体験して理解しているわけです。

でもっともっとこの研究が進んでいけば、おそらく教育そのものはもっと変えられなきゃならないんじゃないかな、という仮説も私の中にあるんです。しかし、そういう経験の中で、「指導とは」ということをもう一度考え直してみると、本当に対等になれ

る、本当にこう自分がすべてをさらけ出せる。もっとちがったことばでいえば、よく昔から「目の鱗が取れる」というような言葉がありますけれども、そういうような本当に目の鱗がとれるような、そういう先生になる、また取れるように努力していく、そういうことがやはり教育の中で本当に考えなきゃいけない大事なことじゃないかなということを、その新任の先生の話や先輩の先生の話から（本当にそうであったかは、その先生から伝え聞いたので、どこでどういうふうにくい違ってきているかわかりませんが）、指導とはということにいつてひとつ考えてみたいなと思ったわけです。

## 教師もイメージを

それから、この前の時もちょっとかたづけのことをいったら、現職研究会でもかたづけの問題が出てきていたようですね。その時皆さんがお話し合いになったことと同じことかもわかりませんが、私はその場にいませんし、その話を聞いてないものですからわからないんですけれども、最近ある幼稚園で、粘土遊びをやって、デコラの張ってある机、一メートル四方の机のまん中にどんと、そこでは粘土を山盛り置いてそれをかってにとって遊ぶことをやっているわけですけれども、遊びがもう終りごろになりますと本当にデコラの所にこびりつくようになって、なかなかかたづけがたいへんなんです。その時たまたまある先生が、爪でもって押すようにでもしなければなかなか取れないので、それをやりながらふっと先生の頭の中にイメージがわいたんですね。どういうイメージかと申しますと、ブルドーザーっていうイメージが出てきたというわけです。

「ガー」とこういいながら、「ブルドーザーだよ」っていいながらその粘土をつめと指で集めるようにされたら、四歳の子どもがわれもわれもと、特に男の子が「ブルドーザー、ブルドーザー」といって粘土を中心に固めていったんです。固まってきたものを、ポリバケツの近くにいた子どもに先生が「誰々ちゃんこれちょっとそこへお願いするわよ」というと、皆が集められてまとまると「お願いするわよ」と先生と同じ言葉でいい、いわれた子はそのバケツの中に放り込む。バケツのそばにいた子どもはいつのまにか入れ役をさせられてしまっていたということです。

これはまた別の日なんですけれども、ブロック積木がよく組み合わさったまましまわれています。なかなか一つずつ取っているとたいへんなものですから、「ちょっと向こう持ってちょうだい」っていって引っぱり合いをして、どっちが強いかなっていいながらみんなでやっているうちに、みんなブロックがもとどおりにな

っていったということです。これはもう前から皆さんが考えていらっしゃることだと思うんですが、しつけというような言葉でよばれているものと、いわゆる遊びという言葉でよばれている幼児の生活とが、何かどこかで統合されていかなきゃいけないのではないかと思います、遊びの形でしつけをするんじゃないということを私はその時また感じました。いわゆる教材といいますか、経験させるべき内容と遊びとがもっと統合されるということが、私は保育の中になければならないんじゃないかな、そのことの方がもっと私はスムーズに子どもの中に位置づいていく。何かそれがばらばらのままであまり遊ばしてばかりいてはいけない、遊びは遊び、仕事は仕事とやっているためやったりやらなかったりというようなことになってくるんじゃないだろうか。

ただ粘土をやるといつでもブルドーザーという、概念ができてしまうかもわかりませんし、もっとそこで違ったイメージが子どもの方から逆に出てくるかもわかりません。何かそういう今までしつけという言葉で考えられてたものと、遊離してしまっているのではないか、そこをもう少し統合するような、そういう活動つまり子どものものになった真の遊びといいますか、そういうものを私たちが真剣に考えとりくむことが必要じゃないか。そのために大事なことは教師自身の中に教師自身がイメージを持った時にそのイメージを子どもにぶつけていくという、そういう姿勢があれば、今言ったようなことが案外できるんじゃないだろうかと思うんです。子どもはどんどんイメージをぶつけてますけれども、その逆に教師自身が教師自身の持ったイメージというものはあまりこう、出ししぶっているんじゃないか、もっと教師のイメージを率直に子どもの前に披露していくことが、あるいは子どものイメージと教師のイメージをぶつけあっていく。ある時には教師が出してもそれに共感してくれないかもわかりませんし、ブルドーザーっていった時に本当にブルドーザーみたいだって共感してくれた時に、そのことがまさに行われている。だからそれは出してみなければ本当にわからないし、もっとどんどん教師のイメージというものを出していく必要があるんじゃないかっていうことをその時思いました。

## 幼児の世界のすばらしさをみつけよう

いいろいろ勝手なことを申しましたが最後に、私はこれからもう少しこんなことをやってみたいなと思うのは、幼児の世界っていうのはすばらしいなあっていうことを、皆さんは恐らくおひとりおひとりがどこかで何かを感じてらっしゃると思うんですけれども、そういう幼児の世界のすばらしさといいますと、何か幼児

の世界に溺れこんでしまってはいけないなんていう批判もあるかもしれません。しかし、いくら考えても、何か教育することによって人間をこう悪くしていっているような感じが私の中には最近起こってしょうがないんです。もっともっと、幼児の世界のすばらしさっていいますかそういうものは、おそらく人間の世界のすばらしさだろうと思うんですけれども、それに気付いていくということ、あるいは今まで気付かれているものをもっと集大成していって、みんながそれに共感していくことができたら、もっと保育は変わっていくんじゃないかということを最近つくづくと感じています。そしてそんなことをやってみたいなと思うんです。つい最近もある幼稚園で小鳥が死んで、その小鳥のお墓を作った時に、じかに入れると冷たいだろうから葉っぱでもってくるんで、埋めたんです。そうしたら半時間もたたないうちにまた四歳の子どもがいつの間にか手のひらの中にその小鳥をかかえているんですね。先生がどうしたのって言ったら、

「この小鳥はね、やっぱりこの中がいいの」

その子どものたなごころの中に死んだ小鳥をじっくり抱いていることに、小鳥の安心さといいますか、そういうものをその子どもは見つけたのではないかと思います。それから、ある幼稚園では死んだエビガニのお墓に毎日々々水をやっている子どもや、それから、死んだお魚を川へ流してやろう、きっと川にはお父さん、お母さんでいるんだからっていうようなことをいった子どももいました。死んだ小鳥をお墓にうめて、その上に高い木を植えてやろう、きっとその上でこれからも遊ぶだろうっていうようなことを考えた子どももいましたし、つい最近ですけれど、まる虫が死んで土の中に埋めたら、またまる虫ってたくさん生まれてくるねっていった子どももいました。何か死というものと、いわゆる生まれ変わってくる、再生と言いましょうか、そういうものとが同時に子ども心の中では感じられていたみたいですね。

死んでしまうと、人間は何か早く忘れてしまうような現代人になりつつありますけれども、何か子どもはもっと暖かい世界に住んでいるみたいです。子どもの世界のすばらしさっていうものを、皆さんは恐らくもっともっとたくさんいろいろなところで感じていらっしゃるんじゃないかと思いますし、これからまた聞かせていただきたいと思います。

（大津市立教育研究所）